

『榊』合本をめぐる話

佐藤 邦夫

先日『榊』の合本第六集が頒布された。これで手元に第一集から第六集まで揃ったので喜んでいいる（下図参照、上列の左端が第一集で右端が第六集）。この合本には少し思い入れがあるので記してみたい。

第一集を入手する

私が入会したのは平成12年の末。合本があることを知って友の会事務局へ問合せ、第二集と第三集は直ぐに入手できたのだが、第一集はすでに売り切れとのことでガツクリ。どうしても第一集が欲しかった筆者はあれこれ思案した。その一は、高知行の機会を得て当地で探せないものかということ。これは数年後実現しそうになった。高松市に出張することになったから。月曜日午後の仕事だから、土曜日の夜行で出発し日曜日を高知市内探索にあてようと考えたのである。予定通り高知駅に着き、最初に寺田寅彦記念館を訪ねたが、周辺の雰囲気は異様で腰が引けてしまった。和服姿のご婦人方が続々と集まっているのだから（後で「お香の会」と知る）。小心中なので玄関側と裏側を外から眺めただけで館内見学をあきらめた。出だしから躓きを感じ、合本探索の意欲が失せたような次第であった。

その二は、思い直して再訪し高知市内の古書店を廻ること。それで当時の『榊』編集長・堀見矩浩様へ「今度高知へ行ったら古書店を廻って第一集を探したい」旨を手紙に書いて送ったら、思いがけない展開になった。数日後、堀見様から封書が届いて「合本は発行部数が少ない。持っている人が手放すとは思えないから古書店へ出回ることはないだろう。」「そんなに欲しいなら、手元に第一集は2冊あるから1冊を譲ってあげよう。」と



いうことで、『榊』合本第一集が同封してあったのだ！これには驚いた。そもそも『榊』合本は堀見様が友の会の活動資金の足しにしようと考えた刊行が始まった由。最後の稀少な第一集を入手した筆者はタダでもらうては申し訳ないので寄付金を奮発して送った（後日、会計報告の中に寄付者として筆者の名を確認している）。注・「別冊」も資金集め目的で刊行。

第一集の複製を作る

写真の上列の6冊は友の会発行の正式版だが、下列の2冊は訳ありのもの。左端は第一集の複製である。上段の原本を静岡市内のコピーセンターへ持ち込んで作ってもらった。これは平成23年1月、東京にお住まいの会員から入手方の問い合わせがあり、友の会に在庫がないことを知っていたので、手持ちの第一集をコピーすることにしたのである（予備一冊も）。最初は自分でコンビニへ行ってコピーしようと考えたのだが、片面コピーでは枚数が2倍になり自前の製本では不細工なものになってしまう。思案してコピーセンターを利用することにした。問合せると「出来ますよ。製本もやりますから。」という回答。もちろん相応の費用はかかるのだが、依頼者のご了解を得た。表紙は同じような色にてお願いした。中央部の白抜きは出来なかったが出来映えは原本よりも立派なくらいで満足している。

第六集を自分で作る

写真の下列の右端は私家版第六集。配付いただいた冊子に筆者が表紙と目次を勝手に作ってコピーセンターに製本してもらったもの。製本の体裁は「これは前にもやりましたね。同じでいいですね。」と言われるのでお任せした結果、複製第一集と同じ色になった。今なら、表紙は黄緑色でお願いしますのだが、これは平成23年12月のこと。なお、この製本代は表紙を付けても一〇五〇円。妙な注文で申し訳ない旨を口にしたら、「製本も仕事

としてやっていますから。」と意に介さない風であった。（これに味をしめた筆者は曾田範宗の文献を調べた際にも、論文集の抜粋と弟子が書いた小伝のコピーを製本してもらい、其々世の中に一冊だけの本となった。）

製本のすすめ

普通に冊子を重ねて製本しても端面（天、小口、地）が凸凹では見た目に悪いが、今回の私家版第六集は新しい本のようにきれいに仕上がっている。聞くと「機械でやりますから。」という。やはり「餅は餅屋」なのだと思った。そこで、本会の皆様で『榊』冊子をきれいに綴じて保存なさりたいなら製本をお勧めする。（好きなように表紙を作ることもできます！）

付記

『榊』の合本を振り返ってみよう。

- 第一集（第1号〜第10号、特集号）
- 第二集（第11号〜第20号、特集号）
- 第三集（第21号〜第27号、特集号）：21世紀のミレニアム記念刊行
- 第四集（第28号〜第39号、特集号）
- 第五集（第40号〜第50号、特集号）
- 第六集（第51号〜第61号）

編集は堀見矩浩様が1号から54号まで務められ、合本及び別冊の刊行にも熱心に取り組まれた。これらの売り上げがどれだけ活動資金の足しになったのか分からないが、筆者は全部協力してきたつもりである。

55号から61号までは菊地時夫様が編集に当たられた。病を得て退任されたので、菊地様は合本第六集の刊行を志しながら果たせなかった。それだけが心残りだったように思われるので、これで安堵されることだろう。

合本第六集を手にして、堀見様・菊地様お二人のご冥福をあらためてお祈りするしだいである。